

下北・核燃を拒否する人たち

農業者を中心に広がる新しい芽

滝川康治

翻弄される周辺酪農民の苦悩

核燃料サイクル基地の建設が進む青森県六ヶ所村は、下北半島の太平洋側に沿って南北に細長く伸びた人口一万入ほどの村である。冷たいヤマセが吹きつける風土のなかで営々とした歴史が刻まれたこの地は、二〇年あまりにわたって、巨大開発の失敗とそれにつけ込んでやってきた核燃計画という「国家的プロジェクト」の下で、多くの人びとの生活が破壊され、国家や資本の暴力に翻弄されてきた。

昨年の県知事選挙で反核燃の候補が敗れてからというもの、事業者側（日本原燃サービス、日本原燃産業）の巻き返しが急だ。今年になってからは、三月末にウラン濃縮工場が本格操業を始め、五月上旬には高レベル核廃

棄物施設の建設に着手した。年内には、低レベル施設に廃棄物の入ったドラム缶が搬入される予定であり、六ヶ所村は「核のゴミ捨て場」にされようとしている。

巨大開発計画の果てに、それだけしかやってこなかった国家石油備蓄基地や、急ピッチで工事が行なわれている再処理工場の敷地は、村の中央部に位置する尾駈沼おゆらぬまを囲むようにして広がる。荒涼とした景色がつづく一帯に立つと、耳をつんざく轟音が飛び込んでくる。頭上で訓練を繰り返すのは、三沢基地から発進したF16戦闘機。地上も、空も、危険物だらけなのである。

その核燃サイトから西へ八キロほど行った、隣の野辺地町の丘陵地帯にある酪農家へ足を運んだ。

「山菜採ったり、チカやホタテ、カレイ、アブラメとかを食べながらだったら、長生きできるいい環境だと思っ

ただけど、それが叶わないとなればね……。でも、畑と牛四、五〇頭持つてどこかへ行けるわけじゃないでしょ。

（核燃で牛乳や牧草に放射能が検出されたら）子どもたちが独立してるなら、『酪農をやめた』って言ってしまえば一番いいなって思います。でも、その時点で借金を返せるかどうかね。いや、実際のところわからないね。ちよつと曖昧な返事ですけど……」

夫と一緒に目ノ越地区で牛を飼う若山フミ子さんが、経営の将来に対する思いを話してくれた。ここも戦闘機の訓練空域になっており、時おり轟音が聞こえる。「笑っていても、大騒ぎしていても、核燃のことが頭をよぎるんです」という言葉が、わたしの胸に重く響いた。

この戦後開拓地で育った若山さんは、就職して茨城県内で働いたことがある。鹿島の子どもたちが数百円の学級費を払うのに一万円札を持ってくる——そんな開発にまつわる話を耳にして、心が痛んだ。「むつ小川原開発」の波が押し寄せていた七二年に帰郷して、保健婦になるために六ヶ所村へ実習に通う。土地売却のお金で競って建てた「開発御殿」に鹿島の話が二重映しになった。

結婚して七八年に実家へ戻り、酪農で生きることになる。牛舎を建てたりして設備投資を図り、数千万円の借金も抱えた。経営を拡充して頑張っていた矢先の八四年春、具体化したのが核燃計画。寝耳に水の話だった。保健婦の経験から放射能の怖さは肌で知るだけに、疑問が

募り反核燃の活動にも参加してきた。いまは中一と小五の母親。自分たちは放射能で白血病や癌にかかってしまった方がないが、子どもにはとても「酪農を引き継いでほしい」と頼めない気持ちだという。

最近、地元の高校を卒業した青年が東京の核燃関係の会社に就職するケースが増えてきた。地元の農協組合長が事業者側の職員と仲が良かったりする。放射能の影響を調べるためか、県が民間会社に委託して、数年前から六ヶ所や周辺の町の家庭の献立調査をつづけている——若山さんらは、核燃の植民地化しつつある六ヶ所周辺の実情を引き合いに出して語りつづけた。

そんな雰囲気の中で声を上げるには勇気がいるが、農業者仲間が存在が心の支えのようだ。核燃の事業者や行政がこうした苦悩を青森の人たちに押しつけ、それに大都市住民の生活スタイルや心のあり方が無言の力となって、核燃計画の不条理さを下支えしている。

「開発の生き字引」とひとつの裁判

「鹿島の三倍もの石油コンビナート地帯をつくる——と始まったのが、二〇年間も何も来ないんですから。今度は核燃三点セットと、とんでもない世界の嫌われ物が来るわけですよ。（原子力先進国の）イギリスやフランスで始末に困ったということは、世界でどうにもせない物注II九五年搬入予定の返還廃棄物のこと」を持ってきたと

たきかわ・こうじ
一九五四年北海道生まれ。和学人文学部中退。地方紙記者。農業などを経て、現在、フリイター。著書『幌延——核の捨て場を拒否する』（技術問）。

見ている。それを唯唯諾諾として受ける馬鹿（現村長）があるか、ということですよ」

いまは奥さんと商店を営む元六ヶ所村長で白髪瘦身の寺下力三郎さん（七九）は、自宅の客間で居住まいを止して言い切った。現在の土田浩村長は八八年暮れ、「再処理工場や高レベル施設の是非は住民投票で決める」などを公約に掲げて当選したが、任期中に実施される可能性はほとんどない。すっかり溶けてしまった「凍結」の約束に、寺下さんの辛辣な言葉がこぼれた。

村長だった七〇年ころに巨大開発が浮上した。当時の村勢要覧に、寺下村長はこう書いている。

「珍しくも残された巨大開発可能な地として一躍脚光を浴び少しく戸惑いを感じている。この未開発の地が人間尊重のための聖域として成長するか、或は轟音と天地水汚濁の利益優先の修羅場と化するか、前途予断を許さぬものが多い。悠久無辺、「雀そこのけお馬が通る」の詩心だけは児孫に伝えたいものである」

国や県に対して異議を唱え、住民には「農民が土地を売って、あるいは漁民が海を売って、月給取りが万年筆とソロバン売って、後でどうして暮らせるのか」と説得に努めた。が、村が「利益優先の修羅場」と化するなかで金に惑わされる人も多く、村長を一期務めただけで名譽ある落選。以後、一村民として「むつ小川原開発」と、それにつづく核燃の反対運動の先頭に立ってきた。

「高レベル」とこれからの運動

核燃は、再処理工場とウラン濃縮工場、低レベル核廃棄物貯蔵施設の三点セットと説明されている。が、一見生産的な濃縮工場で住民や行政の期待感を誘いながら、本命の核のゴミ捨て場、建設を進めようとする計画であることが、ここに来て一段と鮮明になってきた。

とりわけ高レベル施設は、「再処理工場の付帯施設」と

いま、寺下さんは事業者側の三者（原燃サービス、原燃産業、電機事業連合会）を相手取って、ひとつの裁判を係争中である。

三者が村内で発行しているPR誌「ふかだっこ」昨年一〇月号が、尾駮沼で漁をしている寺下さんの写真を、本人の承諾なしに表紙へ掲載したことが事件の発端。写真には、意味ありげに「今日はたくさん嵐にかかったかな？」とのキャプションまで付いた。漁師言葉では、網に嵐をかけるとは言わない。一貫して核燃に反対してきた寺下さんにとって、これ以上の恥辱はない。PR誌の編集を請け負った業者が酒二本を持って謝りに来たり、原燃の事務所へ交渉に訪れた寺下さんらの中に入れなかつたりと、その後の対応も「明治の気骨」を大いに傷つける傲慢なものだった。

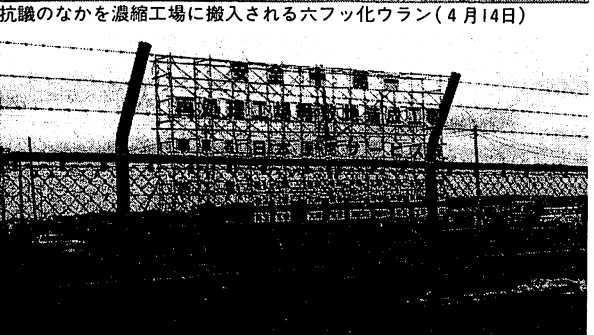
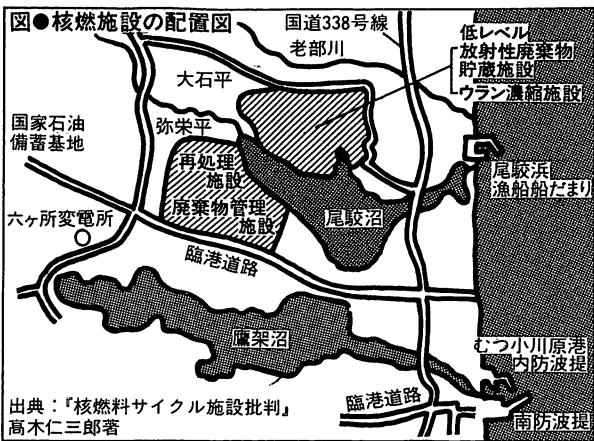
寺下さんは、新聞やPR誌上への謝罪広告の掲載などを求めて、法廷の内外で訴えつつづけている。

「本当に謝れば、それでいいわけですよ。わたしは生きたうちに電事連の連中に一回くらい謝らせたい気持ちがある。銭はないけど仕方がない。売られた喧嘩をかわないで死ぬったら（自分が）かわいそうだしな」

と、自分自身に言い聞かせるような口調で話してくれた。この裁判には、開発の生き字引となった寺下さんの矜持がかかっているのである。

の言い方で、後ろに隠れるようにされていた。数年後に英・仏からの返還廃棄物がガラス固化体の形で戻されるのを前に、反対運動の間隙を縫って一気に呵成に着工した観がある。六ヶ所村には、キャニスターと呼ばれるステンレス容器に入れられた返還廃棄物（当初計画は一四四〇本）と、建設予定の再処理工場から発生する物の二通りを貯蔵する計画だ。

二〇〇年から五〇年間、一時貯蔵したあとで、深い地層



中にキヤニスターを埋め捨てる」というのが、原発推進側が描く高レベル廃棄物処分シナリオ。が、北海道幌延町や岩手県釜石市で計画した、基礎データを収集する地下研究施設（深地層試験場）ひとつをとっても、処分地化を心配する住民の反対で建設のめどすら立っていない。このままでは最終処分地を受け入れる地域はありそうもなく、いったん六ヶ所貯蔵を認めるとそのまま居座る可能性が強い。

五月中旬に来村した谷川科学技術庁長官は、六ヶ所を最終処分地にしないと確約しなかった。これに対して、土田村長は「高レベル廃棄物は五〇年以上、絶対置かせない。それ以降は第二の処分地を建設し、そちらへ持って行ってほしい」と新聞記者に語った（五月一日付『デリーリー東北』）という。この記事からは「五〇年間は置いてもいい」と読めてしまう。そんな弱腰で放射能から地域を守ることができののだろうか。

核燃事業者と国が建設をゴリ押しし、住民の生命を守る義務があるはずの地元自治体も既成事実を追認していく……。そんな現実のなかで、反核燃の運動が粘り強く繰り返り広げられている。

中心的な役割を果たしている「核燃サイクル阻止一万人訴訟原告団」は、ウラン濃縮工場と低レベル核廃棄物施設の事業許可取消訴訟をつづけており、近く高レベル施設の裁判も提起するという。相手を法廷の場に引き出

せるという利点はあるものの、裁判闘争は手間と時間のかかる根気のいる作業でもある。

同原告団のかねめ役の平野良一さん（六四）には、七五年から二期八年間、津軽の中心地・弘前市に近い浪岡町の町長経験がある。県政の裏舞台も熟知しており、早い時期から開発にひそむ核燃の影を感じ取ってきた。

浪岡の商家に生まれ、六〇年安保のときは国会内に缶詰になりながら、商工会組織の法制化を求めて運動していた。県商工会連合会の職員歴が長く、仕事で県内各地を歩き回った。この夏の参院選の自民党候補が県議になった際、参謀役を務めた経験もある。そのころ親交のあった人たちは、すべて核燃推進側に回っている。

核燃絡みの話は、町長に就任して間もなく聞いた。当時の竹内県知事は、平野さんから顔なじみの町村長を呼び寄せて、定期的に懇談の場をもっており、そうした席などで「むつ小川原開発」と原子力施設にまつわる話題を耳にしていた、という。巨大開発に核燃関連の施設が折り込み済みだったとの話は、鎌田慧氏の労作『六ヶ所村の記録』（岩波書店・九一年）を貫くテーマになっているが、そのことを身をもって体験していたわけだ。

町長時代、欧州視察に行った人からスウェーデンの原発国民投票の話を知り、原船問題で菊池むつ市長らに触発されたりするなかで、原子力に対する疑念が徐々に膨らんでいく。七九年のスリーマイル島事故で、そ

した疑問が決定的なものになった。

病気で町長を辞めてからは、自宅で本や資料を読み進めながら核燃に対する危機感を深めていた。その後、末っ子を痛て失い、チェルノブイリやセラフィールドの親の訴えが、息子のことと二重映しになって仕方がなかった。自身の健康を取り戻して、反核燃の運動に没頭するようになったのは、いまから四年前のことである。

青森県が核燃の受け入れを決定したのは八五年四月九日。県内外の人びとは、翌年からこの日を「反核燃の日」として、さまざまな行動を繰り返してきた。今年の取組みを振り返りながら平野さんはこう指摘する。

「いままでの運動は、大同団結にしばられて一点豪華主義になっていたんじゃないか。（知事選などで）一カ所に集まって、花火を打ち上げて満足していた。今年はそれが難しかったので、農業者を中心にいろんなグループが工夫して、いい芽が出てきたと思うんです」

古い商家造りの居間に備えつけた書棚には、原発関連の本がびっしり並んでいる。それを背にしながら、「（運動は）ここ五年間がターニングポイント。農家が余裕のある時期に行動を組んで力をつけ、次の知事選にむけていく——そのために、全国的なネットワークから六ヶ所に進撃してもらおう、また逆に六ヶ所から全国へと進みたい。そして、高レベル施設にガラス固化体が搬入される前に核燃をストップさせたい」

と、これからの活動目標を話してくれた。

佐々木さんが語る地域づくりの道

六ヶ所村平沼で約五〇頭の牛を飼育する佐々木敏さん（上北酪農協理事）の名刺には「核燃に反対を！」、「健康に牛乳を！」と刷り込んである。六年前に自分の牧場で反核燃コンサートを開いており、昨年の再処理工場の公開ヒアリングでは、事前通告を無視して土田村政批判を展開したりした。

一九五七年、中学二年のときに宮城県から移り住んだ。巨大開発のころは酪農の建設期で、経営をやり遂げていくのが精一杯だった。核燃計画が表面化した八四年春、ちやうどトラクター事故で入院しており、友人の話などに触発されて運動に参加するようになった。

佐々木さんは、反核燃は一〇年、二〇年とつづく息の長い運動になると感じている。だから、農業者と消費者をつなぐ取組みを重視しており、若い世代の新規就農にも期待をかける。

「『反対だ！』って来るのは、それでありがたいと思うけど、やっぱり地元の若い人たちが入って定着しながら、一緒に酪農をやる者もいてほしい。消費者から『六ヶ所にこんなもの建てば、モノ買わないよ』と言われるけど、そうなれば我々には『死んでしまえ』になっちゃう。そうじゃなく、同じ痛みを分かち合って、再処理工場とか

が何とかできないように努力しなければならないと思うんだよな」

そのためには、どんなやり方が求められるのか——言葉をつづける。

「我々は長イモやニンジン、牛乳を東京に高く売って所得を得ようとしているけど、発想を変えて、まず地域内で自給しながらおいしい物を食べて、いままでの生活を原点に戻していくことが大切だと思うんだよ。いつも『反対だ。どうだ』だけでは続かない。地域のなかでイベントをしたりして、周りから『いいことやってるな』と言われて初めて、我々に対する信頼が生まれる。事故のことも想定しつつ、地域社会に溶け込んだ運動で住民の意識をこつちに向けさせておかないとな……」

佐々木さんは、農業の実情を知ってもらおう試みとして、子牛のオーナー制度や子どもたちの農村体験、援農などの例を挙げて、運動の発想を転換させながら住民に浸透していくことの大切さを強調していた。都市生活者の側が、その試みにどう応えられるのか——それが、今後の運動を占う重要なカギになるような気がする。

いま、六ヶ所村では電源三法交付金による牛乳処理・加工施設の建設計画があり、運営主体の第二セクターに農協が出資しようとしている。反対色が強い隣の東北町では「原子力専門学校」の計画が具体化してきた。どちらも、農業者を中心に根強い反核燃の機運を押さえ込ん

うとする意図があるようだ。佐々木さんらの役割はますます大きくなっている。

ミニコミ紙や産直で各地とつなぐ

核燃に異議を唱える若手の人びとには、Uターン組や他地域から移り住んだ人が目立つ。

六ヶ所村の西側の丘陵地帯には、牧草やデントコーン（青刈りトウモロコシ）、長イモなどの畑が広がる。その一角、豊原地区に住む菊川慶子さんは、二年前に帰郷して農業を営むかたわら、毎月、村の内外に「うつぎ」というミニコミ紙を発行している。

戦後、サハリンからこの地に入植した両親のもとで育つ。中学を卒業すると青森を離れ、首都圏のあちこちで働いてきた。八六年のチエルノブイリ原発事故のあと、千葉県内で安全食品のグループを結成。数年後、事故による汚染の広がり鮮明になり、衝撃を受けた。原発のことは深く勉強したわけではなかったものの、「核燃は原子力問題のかなめ」と感じていた。そのころ、家族ぐるみで有機農業を志向していた菊川さんは、岐阜県内に土地を求めて引越し準備の最中だった。

が、雑誌「現代農業」に載った久保晴一さん（県農協青年部協議会前会長・現県議）の文章に接して、気持ちに変化していく。九〇年春に帰郷して半年間、実家の近くで農業をしながら周囲を見回してみたが、反対機運が

紙を発行して、生産現場からの問題提起を始めた。

一九五七年生まれの館山さんは、リンゴ農家の次男。

八戸市の高専を中退して同市内のデパートに就職したが、人員整理にあつてしまう。労働組合を結成して委員長となり、解雇撤回闘争に取り組んだ経験もあるが、八三年に結婚したのを契機に家業を引き継いだ。

当時は耕作面積も少なく、経費を節約するために農業の使用量を減らしていった。そのうちに関心を示す業者も現れて、低農薬栽培が軌道に乗ってきた。五年ほど前からジュースの製造も手がけるようになった。

そのころ、徹底した低農薬栽培に努める友人がいて、リンゴの放射能汚染について取引先の消費者に問いかけてきた。が、消費者側は無関心で反応は鈍く、その人は失望して農家をやめてしまった。

友人の思いを引き継いで、今度は館山さんが四月から発行しているミニコミ紙「ばふけけらぐ」で、やんわりと同じように問題をなげかける。

「僕はこのまま少農薬りんごをつくりつづけても、放射能汚染されたら水の泡のような気がします。将来的には、もっとひどい工場も来るんだそうです。皆さんは、汚染がはつきりしても僕のりんごを買ってくれるのでしょうか？」

田舎暮らしやリンゴ園のこと、自然食品店の紹介などの記事に混じって、こんな文章が載っている。「直接運動

盛り上がりつつある雰囲気は伝わってこなかった。それならば、自分のほうから情報を発信して、住民に選択する場をつくってもらえないか——そんなふうを考えて、同年暮れに「うつぎ」を発刊したのだという。

村内の購読者は三〇人ほどで、他地域の読者のほうがずつと多い。周囲の読み手を増やしたいが、なかなか時間が取れないのが悩み。中学時代の同級生と会って話をすると、反対運動に共鳴してくれても、いざ何かの行動となると尻込みする人が多いとか。

「わたしも土田村長の『凍結』が三、四年つづくと思っていました。いま、子ども二人がウラン濃縮工場の近くにある給食センターで作ったものを食べていますが、本当は弁当を持たせたい。でも、そうすると子どもが浮き上がってしまうし……。学校の先生は、意識はもっていても、『発言できない』って言うんですよ」

そんな歯がゆい思いを抱きながら、小さなメディアを発行しつづける。「これから核燃が本格操業することを考えると、自分がどんな農業を選択するか躊躇します」と言う菊川さんだが、今年には観光農園の試みしながら運動につながる模索をしたり、「うつぎ」の輪を広げる工夫をしながら、郷里に根を張ろうとしていた。

弘前市郊外で一・七ヘクタールほどのリンゴ園を営む館山光春さんも帰郷組。反核燃グループの活動に参加する一方で、付き合ひのある消費者などを対象にミニコミ

に関わっていない人に読んでもらい、相手の反応を見た」と話す、館山さん流の反核燃の試みである。

東京から三沢市に移り住んだ高坂明雄さんらは、昨年秋に「六ヶ所産直の会」をつくった。生産者の思いを食卓に届け、食べ物を通してつながりをつくりながら、村の人たちの孤立感を払拭していきたい——というのがスタッフたちの願い。長イモ、サケ、イカ、小魚、海藻類、山菜…などと、六ヶ所の季節の産物を年三回、首都圏を中心に約一二〇世帯へ届けている。

素人がナマ物を取り扱うために、イクラが傷んだりする失敗もあったが、買い手から「こういう方法を待っていた」という反応があったり、生産者の励みになっていくことを知るにつけ、やり甲斐を感じ取っている。参加する生産者や取扱品目が増えて、ゆくゆくは産直で食べたい人材を育てるのが当面の目標とか、「ちよつと大げさな言い方だけれど、産直を通じて『核燃がこなければ食べていけない』という論理に対抗していければ」と、スタッフたちの夢はだんだん膨らんでいく。

昨年春まで、幌延から少し離れた北海道北部の小さな町で暮らしていたわたしは、動力炉・核燃料開発事業団（動燃）の「貯蔵・工学センター計画」の経過を追ってきた。

ここでは、暴走する動燃や地元自治体に対して、周辺の酪農民らがトラクターデモも交えながら声を広げ、議会や農協に反対決議を上げさせてきた。各地の市民運動や労働団体は、それを包み込みながら世論を盛り上げ、知事に反対姿勢を貫かせた。いま、動燃計画は凍結状態に追い込まれている。幌延の一〇年は、巨大開発という前史のなかで厳しい状況を強いられる六ヶ所とは対照的だ。青森の人達に比べたら、何とめぐまれていたんだろう…。

いま青森では、農業者を中心に一過性の運動から脱却して、全国各地の人びととつながっていかうとする動きが少しずつ広がっている。核燃の一部が稼働して、既成事実が積み重なるなかでの取組みには苦勞がつきまとうのだろうか、運動の灯は決して絶えることはない。